

審査の結果の要旨

氏名 多田孝正

本論文は、従来の中国仏教研究の諸成果に対比してみると、およそ三点ほどの基本的特徴を有する。その第一は、「東アジア」という大きな視座のもとに中国仏教の展開を捉えようとしていること、第二は、華嚴思想とともに中国仏教の哲学的精華を代表する天台智顛の思想を一つの中心的な研究対象としながら、その「教学」や「教学史」ではなく、むしろそれが形成されてくる思想史的背景の解明に力を傾けていること、第三は、中国仏教の民衆化のあり方やその宗教性・芸術性を探る上で極めて重要であるにもかかわらず、採り上げられることの少なかった信仰・儀礼の実態の問題を、主に天台仏教との関わりにおいて、文献調査とフィールド・ワークの両面から追求していることである。

本論文は、第一部「天台思想の形成とその展開」、第二部「准提信仰と顕密円通成仏集」、第三部「志磐と水陸儀軌」の三部から成る。

このうち、第一部では、天台宗の大成者智顛(538-597)の修禅の背景にある北地の禅者たちの「通明観」の内容とその意義、天台宗の「九師相承説」、十乘観法成立の経緯とその背景、法華系仏教において仏と衆生が父と子に類比されることの意味、などの究明が遂行されている。これらの研究は、祖統や宗派の枠組みを外して天台智顛を見るとき、かれがいかに位置づけられるべきかを探る試みともいえよう。いくつかの問題の掘り下げ方に若干不満も残るが、「通明観」が偽経『提謂経』の成立に影響を与えたであろうこと、天台宗の中心的教義とされる「円融三諦」が、「境地」ではなく、「主体的活動体」と捉えられるべきことなど、注目に値する新知見が散見される。

第二部は、論者が沖縄において目にした尚寧王(1589-1620)の石棺を飾る宝珠に刻まれた六字の真言(唵嘛叱叭弥吽。Om, mani padme, hūm)に触発されて進めてきた研究の成果である。ここでは、主にその六字の真言を中国において初めて密教の枢要と見なして取り込んだと推測される遼代の道昉(生没年不明)撰『顕密円通成仏心要集』の緻密な解説に力が注がれている。とくに評価されるところは、天台思想と華嚴思想の導入の様態が明確化されたことであろう。ただし、内容の分析には、ときに不十分な点も見受けられる。けれども、これまで本書がほとんど等閑に付されてきたことを考えれば、それはやむをえない。

第三部は、現在も台湾などにおいて行なわれている東アジア仏教の主要な法会である水陸会の「儀軌」としての成立とその伝承・流布について、南宋の志磐(-1269-)が編纂したものを明代の祿宏が重訂した一本、その祿宏本を清代の儀潤が再刊した一本、および、それらとは異なる水陸会関連テキストを伝える韓国の諸本を比較・検討したものである。ここでは、天台思想と華嚴思想の統合を意図した志磐の思想的立場の再評価がなされるとともに、韓国における水陸会の文化的独自性が浮き彫りにされている。

要約していえば、本論文において論者は、現実社会に生きた仏教を明らかにしたいという思いから、まず天台智顛の思想を広い視野に立って考察し、その思想史的位置づけを試みた。この論考によって、智顛が単に「天台宗祖師」にとどまらない「中国仏教者」であることがかなり明確になったと思われる。ついで論者は、この成果の上に、智顛によって大成された天台仏教がその後の東アジア世界にどのように受容され、定着し、さらにまた改変されてきたのかを、准提信仰と水陸儀軌に着目して真摯に追求した。これは、仏教思想の中国民衆社会への浸透と儀礼化、あるいは中国民衆社会が仏教をどのような形で捉え、受け入れてきたかという、基層における仏教と中国社会との交渉についての意欲的な研究といえるもので、論者は実際、その一面を開示することに成功している。論文としての体系性にやや欠ける憾みはあるが、研究方法としても新しい試みであり、学界に大きく寄与することは間違いない。

以上により、本審査委員会は、結論として、本論文を博士（文学）の学位に相当する業績と認定するものである。